

特別寄稿

報うづら 船ぶね 伝 承

— 漁村西野浦の痛ましい物語 —

賛助会員 沢 月 健 介

報(うづら)は、弓の箭(や)を感(か)んじて、腰(こし)に帯(おび)ぎ、  
背(せ)を歩(あ)く武具(ぶき)。報(うづら)船(ぶね)とはその報(うづら)の形(かたち)に中(な)を空(くわ)く  
なるよう、大木(おほき)をくりぬき作(つく)った船(ぶね)。虚舟(うつらぶね)  
(うつらぶね)又は空舟(うつらぶね)とも書く。

今から四百年ばかり昔のことである。今、蒲江町西野浦は七、八戸の家があつて、四、五十人の人間が住み、海に漁(うしほ)する(すま)り、畚(ひん)に雑穀(ざつこく)を作り、素朴(すぼく)で呑気(呑気)な生活をしてゐる僻地(ひんち)の小さい漁村(うしほむら)であつた。人がここに定着(ていちゃく)しはじめた創(はじまり)の頃(ころ)のことである。

ある日、七人ばかりの漁夫(うしほづ)が洲(しづ)の村(むら)の磯(いそ)で、小舟(こぶね)に乗(のり)つて鮫(さま) (あわび)や海藻(うぶくさ)を採(と)つてゐると、沖(おき)の方(かた)から変(へん)な物(もの)が、波(なみ)のまにまにこの磯(いそ)に流れ寄(よ)つて来る。始めに氣(き)付(つ)いた若(わか)い漁夫(うしほづ)が

「ありや何んじやろうか」と皆(みな)に知らせた。

よく見ると、円(まる)く長い胴体(どうたい)のもので、丁度(ちょうど)小さい鯨(くじら)が浮游(うきう)してゐる様(よう)にも見える。それが波(なみ)をかぶりながら沈(しづ)むこともなく、だんだん渚(なぎさ) (なきさ)に近(ちか)よつて来る。漁夫(うしほづ)達は仕事(しごと)の手(て)を休(やす)めて、これまで見たこともないこの漂流物(ひょうりゅうぶつ)を、不思議(ふしぎ)な氣持(きもち)で見(み)てゐるうちに、一種(いっしゆ)の妖(まじな)い

氣(き)を感じて来た。魔性(まじやう)の物(もの)がやつて来たのであるまいかと、怖(おそ)れを抱(いだ)いてみんな船(ぶね)を渚(なぎさ)に漕(こ)ぎよせ、浜(はま)に逃げ上(あ)つてじつと見守(みまも)つて居(ゐ)た。

得(え)体(たい)の知(し)れぬ漂流物(ひょうりゅうぶつ)は、波(なみ)に乗(のり)るようになつて渚(なぎさ)に近づ(ちか)づいて来るが、これはどうやら船(ふね) (へき)も籠(かご) (とも)もない。舷側(へらた)がそのまま伸びて円(まる)く、両方(りやうほう)から覆(おほ) (おほ)いがかぶさつて屋根(やね)をつくつてゐる。丁度(ちょうど)瓜(うり)の中実(なかみ)をくりぬいて浮かべた様(よう)なもので、どちらに傾(かたむ)いても、波(なみ)をかぶつて浸水(しんすい)することも顛覆(てんぷく) (てんぷく)することもない、長円(ながえん)な形の函舟(はなぶね) (はなぶね)である。上部(じやうぶ)に明り採(と)りの小さい窓(まど)さえあるらしい。

漁夫(うしほづ)達は、こんな不可思議(ふかふか)な舟(ふね)を、今まで見たこともない話(わ)に聞いたこともない。自分(自分)達(だ)とはまるで異(ちが)つた世界の物(もの)である。一体(いつたい)中には何(なに)が積(た)まれて居(ゐ)るのだろうか。ひよつとすると人間の死体(したい)が何か入(い)つて居(ゐ)るのではあるまいか。不吉(ふきち)な予感(よかん)と、中(なか)を確(た)めて見(み)たい好奇心(こうきしん)の中で、どうするかと相談(さうだん)した。

七人(しちにん)の中(なか)の年寄(としより)の漁夫(うしほづ)の意見(いけん)で、  
「兎(う)に角(かく)、中(なか)をあらためて見た上で、そのまま沖(おき)へ引き出して流(なが)そう、そうせねばこれはきつと後々(あとあと)と何かの祟(まじな)りが懸(か)つて来るだろう。」

と云(い)うので、一恣(いっし)氣味(きみ)悪い函舟(はなぶね)を、波(なみ)打(う)ち除(ぞ)まで引き上げた。

怖(おそ) (おそ)る怖(おそ)る合蓋(あわせぶた)になつて居(ゐ)る所(ところ)をこじ開(あ)けて見(み)て、彼等(かれら)は眼(まなこ)がくらんだやうで、起(た)ちすくんでしまつた。

開(あ)かれた函舟(はなぶね)の、天井(てんじやう)も胴(どう)の間(ま)も隙(ひま)間(ま)なく漆(うるし) (うるし)塗(ぬ)りになつてゐる。それどころか、積(た)みあふれた長持(ながもち)も櫃(ひつ) (ひつ)、厨子(くし) (くし)の類(たぐひ)が駁(あは)しく薄暗(うすくろ)い中に光(ひかり)輝(かがや)いてゐる。これらも見たこともない高貴(こうき)な感じ(かんじ)の物(もの)ばかり、



片隅には煮熱きの出来る設備と所帯道具まで揃えてあるではないか。初めは舟の格構に不思議を感じ、今また舟の中を見ては、彼等の思慮の外なる別の世界に引き込まれた様な気持になつた。即ち心に魔

がさしたと云うかである。呆然としてゐるばかりであつた。  
 として其処の調度類の蔭にうごめきながら、美々しい服装をした女が三人坐つてゐる。中の一人やう年増らしいのが懐から護り刀をのぞかせ板へかき握へて、他の一人の侍女らしい女と、また七、八才ばかりかと想われる童女を中に、がばう様にしてジツとこちらを見つめて、身構えてゐるではないか。

七人の漁夫はこれを見て膝の上へ上つた。これは愈々魔性の者に相違ない。こんな者ばかりかからあつてはぶらぶらおはするまいと、驚きと恐怖で舟から離れて砂浜に逃げ上る様にして、一延にかたまつて舳舟の様子をうかがつてゐた。

女は髪を長くたらし、打掛姿であつたと云う。都の殿上に仕える美姫達が、この荒磯辺に天降つて来たとしてか想あれぬ、輝くばかりの容装であつたらう。この舟と云い女達と云い、家として無いらぬ荒磯の砂の上は、突然降つて濁いた様に現れたのは、確かに異様な感じであつたらう。漁師達が魔性と想つたのは無理ではなかつたのである。

やがてこの漁夫どもに害意のないのを見てとつたのが、乳人(あかこ)かと想われる年増の女は、侍女と共に童女を抱えるようにして舟を降りて砂浜に立ち、依然として

立ちすくんで居る漁夫を尻眼に、童女を小高い岩の上へ懸掛けさせて、漁夫の一人をさしおいた。この間女達の起居振舞は、真に高貴な者の気品と威厳が備わつて居り、殊に乳人の女は氣高くお作りを払ひ分りの容姿であつた。漁夫たちは魅了されて、これは唯人では無いことを知つた。

「吾等は何も怪しいものではない。この向うに見える伊予の戸島の城主に仕える者で、ここにお連れした根は、お館の姫君である。この度、叛臣の謀反によつて城を攻められたので、その難を避けるためこの姫様を連れて海に逃れ、この地に漂れ着いたのであるが、どうであるか。これを縁として、しばらくの間吾等を匿まつてもらいたい。長い間とは言わぬ。やがて乱が鎮まつたならば、救援の骨が迎へに来ることはなつてゐるから、それまでお前達の所に吾等を匿まつて貰いたい。この願を聞き届けてくれたならば、やがて帰参の時はお前達を侍として取り立てて、お城に連れ帰らう。」

又この西野浦を、十年と経たぬ間に都と変わぬ繁昌の地にしてもやあらうし、当座の償いとして、舟の中にある器物一式をやつてもよい。どうかよくよく考へて、吾等の願いを聞き入れて貰いたい。」

と、初めの態度をあらためて、懇々とたのみ込むのであつた。  
 七人の漁夫はどうするか相談した。この高貴な、そして美しくか弱い美人を見れば、助けてやりたくもある。が、然し、自分等の力で、この狭い西野浦にかくまひおこせるものではない。話の通りなら余りに身分が高くて大

物過ぎる。自分等下々の者の手に負える事ではない。その内に追手がつかつて、巻添えき喰うのは必定である。侍に取り立てて貰うとか、西野浦を都にして呉れるとか、夢の様な話である。侍になろうより、都にして貰うよりも、今まで通り此処で漁をして、安楽に暮してゆくのが自分等の性分に合つて、一番結構な事ではないか。だまされてはいけな、と軍寄漁夫の分別に従つて、厄介なこの漂着舟は、このまま沖へ流しては舞おぬ成なぬぬぬといふことになつた。

相談の暇取るのを見て、乳母はすでに懐剣を抜いて身構えて居た。漁夫等は女達のところに行き、  
「自分達のカでは、到底匿うことは出来ぬから、急いでこの地を去つて、何処か他所へ行つて貰いたい。」  
と、虚舟へ連れ込もうとするが、女達は岩にかじりつくようにしてこれを拒んだので、遂には櫂や水竿を持って、中には金突き持つて来た者もあつた。それを得物にして打ち啖く操りして追つ払うことになつた。

この時乳母は、泣きさけぶ娘を後にかばいながら、  
「これほど事理を打ち聞けて頼んでも、聞き入れなくれぬとは、余りに情ない下司の心根よ。この上は妾達はどうなつてもかまわぬから、こゝ娘だけはどうか助けやうてくれ。」

と、手を合せて漁夫等を掻んだそうである。然し殺氣立つてしまつた若手の漁夫は、女達を打ち啖きして居るうちに、童女と侍女は息絶えて死んでしまつた。

最後まで懐剣で抵抗していた乳母は、漁夫の突き出した金突きで両眼を突かれて、その場に俯伏してしまつたが、血の流れる額を振りあげて西野浦の方に向かい、  
「こんなひどい仕打ちにあわされて無念でならぬ。この怨、今より後七生の間祟つて見せようぞ。」

と叫んで砂の上に倒れたそうである。この女は、やはりその頃の戦国武家の女性として教養を身につけた、凛々しい心情を持つた一かどの女性であつたのである。

七人の漁夫も、殺してまでとは思ひなかつたのであるが、強い抵抗を受けてついそれに釣ひ込まれ、つい憐れしいことをしてしまつた。

三人の屍の前にがくり解けたようになり、助けて匿うよりも一と深い後悔と不安が胸を嚙んだことである。

彼等は意識することなく落ち狩りを行つてしまつたのである。証跡を度さぬよう、虚舟の中の目ぼしい物を、思い思いに分け盗りした。銀は思つた程には持つていなかったらしい。着衣をばき取り、死体は少し離れた山蔭に運び、壊した舟の板片を積み上げ火をかけて焼いた。堅木を剥り抜いて造つた舟は燃えにくく、乳母の着ていた上の衣へ打掛けであらうと一しよに、何時までもくすぶつて煙を上げ、徳密裏に始末しようと焦つてゐる漁夫どもは、気をもませるばかりであつた。一心は盗みとつた諸道具、衣類等も、荷を帰つては却つて眼につく物ばかりで、結局これも皆火にくべた。夫は懐剣と蔀絵された小型の三味線(その頭渡米して来た蛇皮線である)の二品だけ取りかけた。

屍の焼き跡は上をかぶせてわからぬように埋めかくし、踏み荒らされた砂浜をならしたりなど、後始末も大変な時間と労働で、漁夫等には悪夢のような長い一日であつた。

「この事、家内の者にも話してはならぬ。死んでも口にするではない。」

と、堅く誓ひあつて、洲の本の浜から逃げるようにして帰つた。

蛇皮線を持ち帰ったその夜、ぼろ布にくるんで船戸の奥にかくし、懐剣を持ち帰った者は、屋根裏の棟木に縛りつけて人の眼につかぬ様にして、何食もぬ顔をしなから今まで通り漁に出た。然し妙なことに、洲の本の魚場では、今まで程に魚も海藻類も見つからず、不漁になつてしまつた。

老人達は、これが祟りかと心ひそかに怖れた。

何か月か過ぎ、どうやらこの事件も間に葬られてゆくであろうと思われ出した頃の或る日、何処からともなく旅姿の侍らしい男が三人ばかり、西野浦にやつて来て村中と探索して廻つた。

殺された女の言つた通り、巨下の侍が援け出しに来たのである。虚言ではなかつた。やつぱり一城の主の身内の方であつたのだ。

七人組は狼狽した。侍達は村人を集めて、「近頃このあたりには、三人の女性を乗せた船が漂着した筈であるが、それを見かけなしたか。もし見た者があつたら話を聞かせて貰いたい。自分等は主人の命令で、その女達を探し出してお迎えするため、四国路から渡つて来たものである。」

と云つたが、七人組はもとより村中の者一同、「その様な舟は見掛けなんだ。一向に存せぬ。知らぬ」と答えてかしまつて顔そむけた。

翌日侍達は、この近辺の海岸を詳しく搜索することになり、七人組はその案内役を買つて出て、洲の本を避けた蒲江から高山へ元猿へ背後へ芥癩、と太平洋に直向した。西野浦の外側になる遠方ばかり、連れ廻つて、綿密に時間をかけて調べさせた。

侍の中で頭立の年配の男は、

「戸島から潮に乗せて流す舟は、必ず豊後路のこの辺に漂着する様、潮の流れが決まつて居るのじやが、解せぬ事じや。では内側の海岸を一度調べて見よう。」と、芥癩の鼻をめぐり、洲の本の海に舟を入れた。日は暮れかけて居た。そこで陸へ上げてはならぬと、年寄漁夫は思案した。

「ここは私どもの漁場で、毎日漁をしていゝところじやが、漂着物があつたら誰かが気附いた筈なのに、誰もそんなものが流れ着いたのを見ていない。この浜の底の石一つ、藻の一筋、何が何処にあるということまで知りつくした者ばかり。何か変わった物が流れて来ればすぐわかる筈。全く存じませぬ。何もなかつたとせぬは存りますまい。」

ともつともらしく説明した。侍達は、「それがまことならば、これはや日も昏れて来たし、陸に上つて調べるとなれば、これは存じませぬ。」と探索をあきらめて、

「もしも今後、どこかに虚舟漂着の噂でもあつたら、すぐ知らせてもらいたい。」と言ひ残して、翌日西野浦を去つて行つた。

七人組は、はらはらしながら危い瀬戸際を乗り切つた。当時十戸足らずの小さい西野浦にとつては、実に存亡にかかゝる大事件であつたのである。もとより素朴單純な人間ばかりでありながらも、追いつめられ切破つると狡猾な智慧も鋭く、その力である。女子供に至るまでよくよく言い合めて、決してこの事件を口外してはならぬ。もしこの秘密を洩らした者があつたら、村中で建碁にして太平洋の沖に投げ捨てる。——という申合せをして、虚舟の事はこれ以来西野浦の禁忌となつてしまつた。

然しこの事件は、七人組の罪悪感、自責の念をそそるがに、崇りの様なものが何時までも尾を引くのであつた。これから二、三年経つたある日、廻國行脚の六部僧が廻つて来て、七人組のある家に立ち寄り、座敷の壁に釣りや、げてあつた蛇皮線に眼をどめて、

「立派な物じやが、これはお前達の家に置くべきものではない。俺が持つて行こう。」

と、家人が黙秘の間に持つて行つてしまつた。この時、村中慄えおがつて後難を怖れた。

なおまた七人組の若い一人、洲の本で乳母の眼に金突を突き立てた男は、「七生までも崇つてやろう」と言われたその言葉が、何時までも耳に残つていたかであるが、何時の頃からか両眼が赤くただれる様になり、ついには失明してしまつた。それはかりが眼疾は村中に伝へるが、殊に女の眼疾者がだんだんふえてゆく様になり、誰云うとなく、これは洲の本で殺された女性の祟りだということになり、誰ともなく尿を焼き埋めた跡に小さい石を建て、小松を植え、線香をあげて拜む様になつた。唯松葉と云つて今（但し大正年間）でも眼疾の女達の中に日これにお詣りして祈願し、子癒を願う者があつた。

以上が西野浦に残る教舟伝説の大様である。今蒲江町西野浦は戸数四、五百、人口三千余の大集落をなし繁栄しているが、四百年の歴史の底に埋もれて行つたこの事件は、部族の忌まわしい伝説として、いまだに意識の底に生きてゐるのであるまいか。西野浦の人達はこの話を語ることを好まない。

私は大正の中頃西野浦に在住中高千山に登り、海峽の海に浮かぶ鶴来島、沖の島、戸島、日振島等、伊予寄り

の島々の名前を子供達から教へられた時、この話の断片を聴かされて興味を覚え、洲の本の娘松様のこと、またある家の屋根の葺き替へる時、棟木に結びつけた短剣が錆び腐れてゐるのを見た者があつたなど、断片的に知らされた。その後、村の老人達に聴こうとしたが、詳しいことは話してはくれなかつた。私はその断片を綴り合せてこの一文を書いたのである。

どうか西野浦の方々は気さ悪くしないで貰いたい。あなたかたの先輩がしたことは、四百年以上も昔のこと、既に時がすべてを消して呉れているのだから。ちよつとこの虚舟事件から数年後、天正十年には織田信長が、明智光秀のため本能寺で殺され、その光秀は山崎戦戦の直後、京都小栗栖で落人狩の蒙民に殺されてゐるではないか。あの頃は戦乱の紛れに、何処でもそんな事が行なわれていたのである。何れも西野浦部族だけの恥ではなく、その頃の日本人全体の恥なので、あの頃は日本全体が戦乱戦虐の渦中に狂つて居たのである。

なおこの話には附帯した話が残つてゐる。多分両者は関連を持つものであると想おれる。

教舟事件の直後、水立から峠を越えて西野浦に行こうとする部族の族の女があつた。やはり打掛姿の美しい装束であつた。それが道案内を頼んだ男から、大中尾の山中に誘殺された。やつぱり衣類を剥ぎ奪り持物を奪ひ、屍は土に埋め、そこに小松と植えてこれを葬い「娘小松」と呼び馴らわし、村人は怖れてそこに近寄ることを避けて来た。もし「娘小松」に近寄り、その枝を傷めたり、そのあたりか土を掘つたりすると、十二罪衣の娘が夢枕に立つて怨みを述べるといふのである。

つい最近も、ダム工事か何かでこの松を伐ろうとし

たところ、工事関係の親方が病気になり、每晚十二羊衣ひとえの帷かきが夢枕に立ち、あの松を伐つてはならぬと、怒み言ことばを聞かされて困つた、という噂が流れた事があった。時を同じうして、近くの土地で、同じ風体の女が落人狩りに送つたことを想い合わせると、種々事事が想像されるではないか。木立の「雄小松」は、鞆舟が西野浦に漂着した噂を便りに、これと合流しようとして、後北で陸路から西野浦に行こうとして厄に会うたのであらう。戦国末期の乱離興亡の時代である。史実としては残らぬ種々な凶事が、日本の隅々であつた事であらう。

これらの伝承には、然し史実の裏附けらしい事が出来る。ではあるまいか、そのように私は考えている。あくまでこれは私見であるが――

即ち伊予戸島といえ、藤原純友の根拠地日振島と共に、宇和海に横たゑる、可成り大きな島である。四百年余り前其近に館があつたとすれば、そしてその頃この館が家采筋の反逆によつて攻め落されたとすれば、それはさう考へ合はさるゝのは、土佐の国司大名、中村御所といはれてゐた、一条家滅亡の顛末である。

一条家は一条兼良を祖とする公卿中の名家である。文和(一四七)一四八七の頃左大臣一条教房は乱を避けて土佐に下り、幡多郡中村の地に居を構へ、土佐の国司となつた。その後房家、兼房と、代々中村御所と云われて、土佐一國の豪族を統べ、勢力を振つて居たのであるが、元龜・天正の頃(今より四百年前)一条兼定は長曾我部元親の圧力に押されて中村御所を追われ、大友家を頼つて豊後に亡命する破目になつた。これが天正元年(一五七三)の事である。兼定の夫人は大友宗麟の女であつたからであらう。大友の援けを得て、翌天正二年に伊予の戸島に拠り、

旧領回復の機を窺うかがつてゐるうちに、元親の謀略にあり、臣下の者から攻められて戦死するのである。落城に当り他日を期して、兼定縁辺の妻妾子女を、鞆舟に乗せて流したもののが、西野浦の洲の本海岸に漂着したのであらうと、私は思ふのである。

鞆舟の女達の衣裳や態度、物腰が、お公卿風であつたといふこと、西野浦を都にして遷るなど云つたこと等、一条家が御所と謂われて、朝廷からは根拠家として特別待遇を受け、京風の生活をしてゐたこと等思ひ合せて、私は想ひ半と過ぐるの感がしてならないのである。

既に大友氏は島津のためは領國を攻略されて敗亡の直前であり、おが依伯地方の領主佐伯惟定も、大友氏に殉じて領土を捨て、河延が亡命しようとしてゐる頃のことだ、一条家のことなど聞つては居れなかつたのであらう。こゝろの歴史的背景の中に、鞆舟のことは軍なる伝承となつて、細々と残つて居るのである。

(おあり)

郡制と後半の郡長

明治十二年(一八七九)

海部郡を南北西郡に分ち、南海部後所を開設する。

大正十五年(一九二六)

六月廿六日廢庁式挙行  
六月三十日郡制廢止

郡長氏名	就任	付記
第八代 名羅間政輔	三九三	
第九代 河越万三郎	四三二	郡史依伯中學校長
第十代 田島七郎	五九一	
第十一代 岩松繁夫	三六一	
第十二代 沖田義信	六三一	
第十三代 熊谷頼太郎	六三一	
第十四代 總坂重吉	六八一	
第十五代 山田氏藏	一三三	郡役所暫設
最後 加藤安藏	一三〇	全一五六廢止

(本会顧問高野氏の資料による)